

心理学研究室報

平成27年度 専修大学人間科学部心理学科 大学院文学研究科心理学専攻

I. 専修大学心理学研究室

人間科学部心理学科報告（吉田弘道学科長）

4月に1年生が76人入学してきました。それに続いて恒例となっているフレッシュマンキャンプが、4月18日、19日の1泊2日の日程で、伊勢原セミナーハウスにて開催されました。実行委員会のメンバーの2～4年生の主導のもと、新入生同士、あるいは教員との交流を深める機会となりました。大学院では修士課程1年生が9人入学し、修士2年生17人、博士後期課程7人で、大学院生計33人という数になりました。1年生が少ないのですが、心理学科としては多い人数です。それぞれの院生は、各自専門とする領域の研究を進めながら、臨床心理士を志望している院生は、実習を含めた教育・訓練を受けています。

教員については、これまで専任だった藤岡新治教授が特任教授（専任）にられました。また、高田夏子准教授、岡村陽子准教授のお二人が4月から教授職に昇格されました。岡田謙介准教授は長期在外研究員として4月から1年間の予定でアメリカに留学されました。さらに、久方瑠美助教が着任され、研究に取り組むと共に、授業も担当されています。以上専任教員14人、助教1人、実習助手2人という教員組織で、力を合わせて学科を発展させるべく、教育と研究を行っています。

ところで、昨年の9月に学部長になられた山上精次教授は、これまでの長い間の教育、研究活動、そして学務関係のご経験を生かしながら、人間科学部をリードするお役目を担って忙しく活動されています。

学科全体の研究では、全教員と乾吉佑名誉教授、そして長谷川寿一東大教授（東大副学長）で組織し、専修大学社会知性開発研究センター・心理科学研究センターを組織名とする研究プロジェクト「融合的心理科学の創成：心の連続性を探る」が、平成23年度の開始から5年が経過し、27年度が最終年度となりました。10月24日に「融合的心理科学の創成：心の連続性を探る」をテーマに国際シンポジウムを開催し、最終年のまとめとなる研究成果が発表されました。

新しい動きとしては、心理臨床の仕事に携わっている専門職にとって、そして利用者にとっても長年の念願であった、心理臨床の専門職の国家資格化の動きが進み、公認心理師法案が27年9月に国会で成立しました。これを受けて、私たち心理学科では、公認心理師のカリキュラムに対応した科目編成にすべく、準備を進めています。

文学研究科心理学専攻報告（下斗米淳文学研究科委員心理学専攻主幹）

本年度文学研究科心理学専攻の修士課程には、1年次9

名、2年次17名が在学し、博士課程には3年次2名、4年次1名、5年次以上4名が在学しておりました。例年と同様に、基礎心理学系の院生は実験等研究活動に励み、学位論文に向けて着実に議論の精緻化と深化が図られ、また臨床心理学系の院生においても、実習に精力的に取り組み、現場を志向しその素養を確実に高められた様子を窺うことができました。研究成果を国内外の学会で発表する院生も増え、修士論文中間報告会、院生研究会やカンファレンスなど、院生相互に刺激をしい、理学専攻全体の雰囲気は優れて活発なものでした。今年度修士論文は17名全員が提出し、合格しました。また博士課程でも、石川健太さんが博士論文を提出し博士号を授与され、専攻全体に充実した年度となりました。

心理学専攻では今年度、今後院生一人ひとりの研究と学修をより高次に推し進めてもらえるよう、院生の要望をアンケートにより聞きました。教員は、院生に寄り添いながら、しかし専門家の卵として対等に議論を深めながら指導・教育を行ってききましたが、院生がそれに確実に応えてくれている姿は、心理学専攻にとり何よりもうれしいことと受けとめています。

II. 心理学教員研究室報告

14人の専任教員で構成されています。今年度は岡田謙介准教授が特別研究員でした。以下は各教員研究室年度報告です。

藤岡研究室（心理査定学）

長年の課題であり念願であった公認心理師法が、本年度9月9日、参議院本会議において全会一致で可決成立をしました。それに伴って、11月6日には、三団体会議による「公認心理師教育カリキュラム案」が提示されました。この案をめぐっては、いろいろな大学の教員から「とても対応できない」「具体的に不明、曖昧な点が多い」「心理査定に関して、従来より重きを置いている」などの声が聞かれました。来年の3月末には、正式にカリキュラムが発表されるので、それを睨みながら、カリキュラムの整備を急ぐ必要があると思います。

平成27年度も「心理査定学」全般に渡って学ぶことを目的に、各種の心理検査の体験・解釈、論文の購読などを行ってきました。本年の研究室の構成は、大学院修士課程院生2名、学部学生8名でしたが、修士論文、卒業論文、プレ卒論に、真摯に取り組んできました。

今年の夏のゼミ合宿は、9月10日～12日（2泊3日）、秩父の「梁山泊」にて行いました。参加者は、学部学生7名、大学院生1名、大学院修了生2名の10名でした。例年より、臨床心理学の知識の幅を広げるために、「不安症を治す」（大野裕 幻冬舎新書）を読みました。

最後になりましたが、本年4月より、藤岡は特任教授に就任いたしました。

諸活動

石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治（2015）：援助

要請と生活適応感の関連性～他者軽視と自尊感情の観点から
～ 日本心理学会第78回大会 名古屋大学

藤岡新治 (2015): 座長 荒井淳・木下直紀・塚原さち子・岩倉拓 統合失調症前駆期のロールシャッハ上の特徴 (その2) 一顕在発症後に施工した再検査結果との比較から
— 日本ロールシャッハ学会第19回大会 立正大学

日本ロールシャッハ学会 監事

石金研究室 (生理心理学・脳科学)

私たちの研究室では心理学で取り扱う様々なトピックについて、脳活動からその処理過程を明らかにする研究を行っています。今年度の人員構成は、教員1名、大学院博士研究生1名、大学院博士後期課程1名、大学院修士課程1名、学部生11名でした。本研究室では情報処理中の人間の脳活動を脳波やNIRS (近赤外線光を用いた脳計測) により測定する研究と、動物を使用して視覚の神経基盤を調べる研究を行っています。脳活動を測定する研究では、人間が何かを見たり注意を向けたりした時に活動する脳の領域とその特性を調べています。また、視覚の神経基盤を調べる研究では、比較的単純な視覚誘発性行動と神経活動との関連から、視知覚成立の基礎となる神経基盤を解明することを目指しています。今年の卒業論文研究では、自己顔、既知顔、未知顔の視覚情報処理について脳波 (事象関連電位) により解析する研究や、摂食障害傾向と知覚特性との関連について心理物理学的手法を用いてアプローチする研究が行われました。また、音楽聴取と α 波や β 波などの基礎律動との関係を調べた上で、それらと時間知覚や時間生成との関係を調べたり、認知課題の成績との関係を調べたりする研究も行われました。

米国フロリダ州で5月に開催されたVSS2015 (Vision Sciences Society the 15th Annual Meeting) において、博士課程の長畑さんは摂食障害傾向と知覚特性との関連について心理物理学的手法により調べた研究を発表しました。また、同学会において修士課程の松崎さんは、視覚誘発性逃避行動に関連する初期視覚系のニューロン活動を調べた研究を発表しました。両名とも世界各国から集まった研究者と堂々と渡り合い、有意義な議論を行うことができました。

ゼミ合宿は湯河原で開催され、終日発表と盛んな討論が行われました。夜には砂浜で花火大会を観覧したり、カードゲームやゼミ生によるマジックショーを楽しんだりしました。

諸活動

松崎みどり・矢吹美帆・中沢仁・石金浩史 (2015)。運動刺激順応後に観察される視運動反応の変化。日本神経回路学会第25回全国大会講演論文集, 10-11。

Matsuzaki, M. & Ishikane, H. (2015). Retinal representation of escape-related visual information. Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, Florida, USA.

Nagahata, M., Onoda, M., Mito, E., Harasawa, M., & Ishikane, H. (2015). Relationships between eating disorder tendency and body image-related size perception. Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, Florida,

USA.

石金浩史・松崎みどり・矢吹美帆・中沢仁 (2015)。運動刺激の長時間呈示がマウス視覚誘発性行に及ぼす影響。2015年度視覚科学フォーラム, ホテル福島グリーンパレス, 福島。

川島桐吾・谷原明子・瀧澤伸剛・大下陽介・坪泰宏・北野勝則・天野晃・石金浩史・小池千恵子 (2015)。網膜 ON 型機能欠損マウスの神経回路および投射経路解析。2015年度視覚科学フォーラム, ホテル福島グリーンパレス, 福島。

松崎みどり・矢吹美帆・中沢仁・石金浩史 (2015)。運動刺激順応後に観察される視運動反応の変化。日本神経回路学会第25回全国大会, 電気通信大学, 調布。

長畑萌・佐藤駿・中沢仁・原澤賢亮・石金浩史 (2015)。摂食障害傾向は身体画像の大きさ知覚に影響する。日本心理学会第79回大会, 名古屋国際会議場, 名古屋。

社会的活動

日本心理学会 代議員

日本基礎心理学会 理事, 若手研究者特別委員会担当

視覚科学フォーラム運営委員

国里研究室 (臨床心理学)

私たちの研究室は、行動・生理実験や計算論的なアプローチを用いて、不安や抑うつ発症・維持メカニズムの解明や認知行動療法の作用メカニズムを明らかにすることを主な目的としています。平成27年度の人員構成は、教員1名、大学院生4名 (修士1年: 1名, 修士2年: 3名), 学部生14名 (3年: 8名, 4年: 6名) でした。

大学院生は、臨床心理学に関する専門的知識を学ぶと同時に修士論文の研究を行い、全員が国内学会 (日本認知・行動療法学会) において研究発表を行いました。修士2年の坂本さんと柚取さんは、The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology に参加し、国里研究室の大学院生としては初めての国際会議での発表を行いました。また、認知行動療法の勉強会を基礎編 (教科書の輪読) と実践編 (ケース検討) に分けて実施し、それにも積極的に参加しています。昨年度から本年度にかけて、「Bayesian Cognitive Modeling: A Practical Course」の輪読を中心に、Stanを用いたベイズ認知モデリングの学習を進め、私たちの研究室でも階層ベイズを用いた解析が可能になってきました。

学部4年生は、昨年度学んだことを活かしながら、それぞれの関心に合わせた調査や実験を行いました。特に、金子さんと土谷さんは、PsychoPyを用いた実験課題のプログラミングに取り組み、新規の実験課題を作成した上で、研究を行うことができました。学部3年生は、臨床心理学の研究法と認知行動療法に関する輪読を通して、専門的な知識を身につけるとともに、PsychoPyを用いた実験課題の作成やRを用いたデータプログラミングも身につけながら、卒業研究の準備をしています。

今年度のゼミ合宿は、秩父で実施し、修士・学部ともに全

員が参加しました（修士と学部は別日に実施）。今年は、ワールドカフェ方式での発表を取り入れることで、合宿に参加した学生それぞれが積極的に発言するようになりました。普段とは違う場所で発表やディスカッションを行い、着実に卒業論文や修士論文に向けた準備ができていたように思います。本研究室は、今年で3年目となり、生理指標を用いた実験もようやくスタートしました。今後も、臨床に還元することを目指した研究に、研究室全体で取り組んでいきたいと思っています。

諸活動

Nishiyama, Y., Okamoto, Y., Kunisato, Y., Okada, G., Yoshimura, S., Kanai, Y., Yamamura, T., Yoshino, A., Jinnin, R., Takagaki, K., Onoda, K., & Yamawaki, S. (2015). fMRI Study of Social Anxiety during Social Ostracism with and without Emotional Support. PLoS ONE, 10 (5): e0127426.

Tsukue, R., Okamoto, Y., Yoshino, A., Kunisato, Y., Takagaki, K., Takebayashi, Y., Tanaka, K., Konuma, K., Tsukue, I., & Yamawaki, S. (2015). Do Individuals With Alcohol Dependence Show Higher Unfairness Sensitivity? -The Relationship Between Impulsivity and Unfairness Sensitivity in Alcohol-Dependent Adults-. Alcoholism, clinical and experimental research, 39 (10), 2016-2021.

伊藤理紗・兼子唯・巢山晴菜・佐藤秀樹・横山仁史・国里愛彦・鈴木伸一（印刷中）。単一恐怖症状の高い大学生における、エクスポージャー中の安全確保行動の効果。行動療法研究

国里愛彦（2015）。系統的展望とメタアナリシスの必須事項。行動療法研究, 41 (1), 3-12。

小川祐子・武井優子・古賀晴美・島田真衣・長尾愛美・佐々木美保・国里愛彦・谷川啓司・鈴木伸一（2015）。補完代替療法をうける外来がん患者を対象とした主治医と話すことへのためらいの構成概念の検討。心身医学, 55 (7), 873-883。

国里愛彦（2015）。行動医学と生物統計学。In 野村忍・堤明純・島津明人・中尾睦宏・吉内一浩（編），行動医学テキスト（pp. 73-78）。東京：中外医学社。

Sakamoto, J., Somatori, K., Okubo, M., & Kunisato, Y. (2015). Depression and Intertemporal Choice of Pain: Maximum Likelihood Estimation vs. Hierarchical Bayesian Analysis. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, July 18, Newport Beach, California, USA.

Somatori, K., Sakamoto, J., Shimotomai, A., & Kunisato, Y. (2015). What is a true measure for meta-cognition?: A Bayesian cognitive modeling approach. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, July 18, Newport Beach, California, USA.

Tanaka, T., Kunisato, Y., Okada, K., & Okubo, M. (2015). Why people frequently commit the base-rate fallacy. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, July 18, Newport Beach, California, USA.

chology, July 18, Newport Beach, California, USA.

兼子唯・巢山晴菜・国里愛彦・伊藤理紗・鈴木伸一（2015）。不安からの回避・逃避行動の分類の検討 第7回日本不安症学会学術大会 広島 アステールプラザ

国里愛彦・柚取恵太（2015）。連合学習理論と不安症。シンポジウム「不安障害の心理学基礎研究と認知行動療法」第7回日本不安症学会学術大会 広島 アステールプラザ

国里愛彦（2015）。論文作成における尺度開発の方法と実際。機関誌編集委員会企画シンポジウム 日本健康心理学会第28回大会 東京 桜美林大学

国里愛彦（2015）。介入効果のメタ分析。公募シンポジウム「現場に役立つ心理学（5）：研究・実践の効果を測定するための研究デザインとデータ分析」日本心理学会第79回大会 名古屋 名古屋国際会議場

国里愛彦（2015）。うつ病の反すうに関する脳画像研究。公募シンポジウム「反すう研究の最前線：国内で行われた研究を中心に」日本心理学会第79回大会 名古屋 名古屋国際会議場

国里愛彦（2015）。PROMISの取り組み。臨床疫学研究における報告の質向上のための統計学の研究会 東京 東京医科歯科大学

小田島裕佳・佐々木彩・国里愛彦・熊野宏昭（2015）。注意バイアス修正課題の教示内容が社交不安と背外側前頭前野の総ヘモグロビン濃度に及ぼす影響：近赤外線分光法を用いた検討 日本認知・行動療法学会第41回大会 仙台 仙台国際センター

坂本次郎・大久保街亜・国里愛彦（2015）。抑うつにおける痛みの将来予測と意思決定：計算論アプローチによる意思決定過程の検討 日本認知・行動療法学会第41回大会 仙台 仙台国際センター

柚取恵太・下斗米淳・国里愛彦（2015）。新たなメタ認知課題の作成と妥当性の検討 日本認知・行動療法学会第41回大会 仙台 仙台国際センター

高垣耕企・岡本泰昌・神人 蘭・森 麻子・西山佳子・山村崇尚・横山仁史・塩田翔一・岡本百合・三宅典恵・尾形明子・国里愛彦・川上憲人・古川壽亮・山脇成人（2015）。青年期閾値下うつを対象とした短期行動活性化の効果：無作為化比較試験 第12回日本うつ病学会総会 東京 京王プラザホテル

時田涼子・坂本次郎・柚取恵太・澤幸祐・国里愛彦（2015）。経験サンプリングにおける喫煙に渴望が与える影響：系統的レビューとメタアナリシス 日本認知・行動療法学会第41回大会 仙台 仙台国際センター

吉村普平・岡本泰昌・松永美希・国里愛彦・小野田慶一・鈴木伸一・山脇成人（2015）。うつ病に対する認知行動療法における内側前頭前野：前帯状回間の機能的結合性の変化について 日本心理学会第79回大会 名古屋 名古屋国際会議場

日本認知・行動療法学会 編集委員

日本認知・行動療法学会第41回大会 プログラム委員

村松研究室（非行・犯罪心理学）

研究室では主に、非行・犯罪心理学、非行臨床を研究しております。平成27年度は大学院生（修士課程3名、学部学生12名）が所属しており、少年犯罪のみならず、青年期や家族の問題など幅広く研究しております。非行臨床に関する研究成果は、矯正研修所（法務省）、法務総合研究所、児童相談所（千葉市・横浜市）、少年サポートセンター（千葉県警）、少年相談担当者技術研修会（神奈川県警）、千葉家庭裁判所などにおいて研修、スーパービジョンという形式で発表しております。少しでも人の役に立つ心理学の構築を目標に、心理臨床の実務家に対してより高度な非行臨床の技術を提供することを目指しております。また、非行臨床の分野における優れた臨床家の育成も研究室の重要な役割の一つであり、家庭裁判所調査官、法務技官、法務教官、保護観察官などを目指す学生が学んでおります。

諸活動

村松 励（2015）。書評：家裁調査官から見た現代の非行と家族—司法臨床の現場から。創元社。精神療法。41（5）。136-137。

日本家族研究・家族療法学会第32回大会（2015）。自主シンポジウム「刑事裁判における家族臨床の意義と可能性」指定討論

日本家族研究・家族療法学会第32回大会（2015）。研修事例スーパービジョン 司会

日本犯罪学会評議員（平成26年10月～）

日本犯罪心理学会理事（平成27年9月～）

中沢研究室（知覚心理学）

この研究室では、外界からの感覚・知覚的情報を心がどのように処理しているのかについて、またその結果として生じる知覚像がどのような性質をもっているのかについてを調べる研究を行っています。これまでの学生さんによる研究は、「感じられる時間の歪み」「文字の読みやすさの要因」「フォントによる語の印象への影響」「言語の情動価と記憶」「偶発学習と記憶」「motion induced blindness（運動する刺激によって周辺視野の静止刺激が知覚されなくなる現象）」「視覚情報による嗅覚情報への干渉」「音楽の印象をつくる要因」などのテーマでなされてきました。

27年3月に3名の卒業生を輩出し、今年度は4年次以上5名、3年次7名、修士2年次1名という構成でした。平成27年度の学生メンバーの研究のテーマは、顔図形と色における情報処理、顔の魅力と視線による注意への影響、図形のカテゴリー概念と形状における類似性に関する情報処理、カテゴリー概念の距離と検索誘導性忘却効果、音韻的類似性と読字行為の記憶に及ぼす影響、など多岐にわたっています。夏のゼミ合宿は、伊豆高原の合宿施設で、それぞれの研究のテーマを持ち寄って侃々諤々の熱い討論を深夜に及ぶまで行いました。もちろん味覚と嗅覚の実験も交えながら。さらには、言語論理だけではなく感覚知覚を研ぎ澄まして人間に関する情報取得を図ったりもしています。

諸活動

佐藤 駿・中沢 仁（2015）短時間順応下での時間知覚—方位選択的処理の寄与—。基礎心理学研究，34，45-52。

佐藤 駿・中沢 仁（2014）視覚的運動情報による時間知覚の変化—先行刺激および対象の運動が及ぼす影響とその相互作用。日本基礎心理学会第33回大会，首都大学東京。

岡村研究室（リハビリテーション心理学）

研究室で取り組んでいる研究の対象は、小児から成人までリハビリテーションの対象となる障害を抱える人々です。様々な障害に対して心理的な構造を明らかにして、どんなアプローチができるのかについて研究しています。研究室には大学院生1名、学部生12名です。学部のゼミでは特に体験を重視して、様々な施設の見学やボランティア体験をできるだけたくさんできるように考えています。体験の中から本当に必要なこと、興味の持てることをテーマに研究をするを願っています。今年度は、川崎市北部リハビリテーションセンターの見学、国際福祉機器展見学、川崎市北部リハビリテーションフェスタへのボランティア参加と様々な体験ができたことを嬉しく思っています。

私自身の専門は、臨床神経心理学で、なかでも脳損傷に起因する高次脳機能障害者に対する神経心理学的アセスメント、認知リハビリテーションが研究対象です。昨年1年間のロンドンでの在外研究から帰国して、いろいろやりたいと思っていることはたくさんありますので、来年度も学生とともに研鑽していきたいと思っています。

合わせて、2011年度より専修大学心理教育相談室において、高次脳機能障害者の心理相談及び認知訓練教室を実施しています。臨床活動にもこれから研究室全体で取り組んでいきたいと思っています。

諸活動

岡村 陽子（2015）高齢高次脳機能障害者のQOL及びウェルビーイングに影響を与える要因 人文科学研究会年報，45，89-105。専修大学人文科学研究会

岡村 陽子（2015）高次脳機能障害者の心理的適応に認知リハへの参加が与える影響 第39回日本高次脳機能障害学会学術総会

松井 健太・安保 博史・渥美 美奈子・浦雄 司・小磯 さおり・濱口 陽介・数野 理恵・平野 栄・白野 明・岡村 陽子 生活行動スキルを重視した高次脳機能障害グループプログラム—当事者、家族のQOL変化から一考察— 第39回日本高次脳機能障害学会学術総会

大久保研究室（認知心理学）

私たちの研究室では、心の情報処理を研究しています。平成27年度の人員構成は、教員1名、客員研究員1名、大学院生4名（博士課程3名、修士課程1名）、学部学生14名でした。今年度も大学院生は積極的に研究に励み、学会で成果を発表しました。石川 健太くんは、これまでの研究成果をまとめ博士論文を提出し、無事に博士（心理学）の学位を取得し

ました。私たちの研究室出身の初めての博士です。とても喜ばしく思います。学部学生は自分自身の卒業論文の完成に向けて研究に勤しみました。卒業論文の進行は遅れ気味で、4年生はなかなか難儀したようでした。それでも、努力を惜しまず必死でがんばっていたようです。満足な結果になった人もそうでない人もいたようですが、すべて良い経験なと思います。

さらに昨年に引き続きノルウェーのオスロ大学から Bruno Laeng 教授を客員研究員として迎えることができました。わずか1ヶ月間の滞在でしたが、世界的な研究者と日常的にふれあうことができました。大学院生にとっては、英語力が向上するなどとても良い機会となったと思います。

充実していたのは研究・学業だけではありません。春には毎年恒例となった屋形船の会で天婦羅や刺身を楽しみました。今年は隅田川を上り、スカイツリーを間近で眺めることができました。夏には合宿で伊東温泉を訪れ、しっかり温泉につかりました。海では水鉄砲、スイカ割り、砂遊び、夜にはバーベキューを認知研究室一同で（もちろんたくさんのOBと共に）楽しみました。今年は氷水の水鉄砲で掛け合うという斬新な展開があり、なかなかスリリングでした。1歳児も参加してとても楽しかったですね。実に有意義な合宿でした。

認知研究室は、いつもながら「良く学び、良く遊ぶ」の1年でした。

諸活動

Okubo, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Laeng, B., & Tommasi, L. (2015). Cool guys and warm husbands: The effect of smiling on male facial attractiveness for short- and long-term relationships. *Evolutionary Psychology*, 13, 1474704915600567.

大久保街亜 (2015)。統計学的に有意？帰無仮説検定でわかること・わからないこと。心理学ワールド, 68, 17-20。

大久保街亜・鈴木玄 (2014)。日本語版 FLANDERS リキ手テスト：信頼性と妥当性の検討。心理学研究, 85, 474-481。

大久保街亜 (2015)。神経心理学的テスト：行動から脳機能を測定する。日本心理学会認定心理士資格認定委員会編 認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎, pp. 262-273, 金子書房。

大久保街亜 (2015)。カテゴリカル・データの分析 pp. 172-187, 効果量 pp. 200-214, 検定力 pp. 215-217, メタ分析 pp. 228-242, 小野寺孝義 (編) 新訂 心理・教育統計法特論, NHK 出版。

Okubo, M. (2015). Race illusion: A pupillometry study. Illusions - present and future. Open, international seminar on perceptual Illusions. University of Oslo, Oslo, Norway. (Invited talk)

Okubo, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2015). Lateral posing bias for displaying trustworthiness. Biennial conference of Asian Association of Social Psycholo-

gy and PAP 52nd Annual convention, Waterfront Hotel, Cebu City, Philippines.

Sakamoto, J., Somatori, K., Okubo, M., & Kunisato, Y. (2015). Depression and Intertemporal Choice of Pain: Maximum Likelihood Estimation vs. Hierarchical Bayesian Analysis. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, Newport Beach, California, USA.

Tanaka, T., Kunisato, Y., Okada, K., & Okubo, M. (2015). Why people frequently commit the base-rate fallacy. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, Newport Beach, California, USA.

Okubo, M., Kobayashi, A., & Ishikawa, K. (2014). Lateral posing bias in social exchange. The 55th annual meeting of Psychonomic Society, Hyatt Regency Long Beach, Long Beach, California, USA.

Ishikawa, K. & Okubo, M. (2014). The effect of social anxiety on metaphorical association between facial expression and brightness. Object Perception, Attention and Memory, Hyatt Regency Long Beach, Long Beach, California, USA.

Kobayashi, A. & Okubo, M. (2014). Effect of pressure on working memory components. Object Perception, Attention and Memory, Hyatt Regency Long Beach, Long Beach, California, USA.

Suzuki, H. & Okubo, M. (2014). The effect of perceptual load on priming during attentional blink. Object Perception, Attention and Memory, Hyatt Regency Long Beach, Long Beach, California, USA.

大久保街亜・石川健太・小林晃洋 (2015)。笑顔の男性は魅力的か？電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会，沖縄産業センター。

坂本次郎・大久保街亜・国里愛彦 (2015)。抑うつにおける痛みの将来予測と意思決定：計算論アプローチによる意思決定過程の検討 日本認知・行動療法学会第41回大会 仙台 仙台国際センター。

石川健太・大久保街亜 (2015)。社交不安が他者の視線変化検出に与える効果，日本心理学会第79回大会，名古屋国際会議場。

鈴木玄・大久保街亜 (2015)。視線変化による注意捕捉は男女で異なる。日本心理学会第79回大会，名古屋国際会議場。

小林晃洋・大久保街亜 (2014)。ワーキングメモリ要素に対するプレッシャーの効果。日本基礎心理学会第33回大会，首都大学東京。

鈴木玄・大久保街亜 (2014)。非注意による見落としは意味の類似性で変化する。日本基礎心理学会第33回大会，首都大学東京。

加藤雅士・大久保街亜 (2014)。眼球運動による幻効果の検討。日本基礎心理学会第33回大会，首都大学東京。

長田研究室（発達精神病理学，障害児心理学）

教員1名，大学院生4名，学部生13名で構成されています。ゼミ生は，それぞれ独自のテーマで研究を進め，臨床実習を行うほか，学会への参加など活発に行っています。

本研究室のチーフの研究課題は，神経発達症への早期介入尺度および療育法の開発のほか，児童期思春期の問題行動の評価および予防の開発です。児童期に発する反社会的行動を発達精神病学の観点から予防できないかという壮大な取り組みを始めています。また，精神疾患を有する親の子育て支援というテーマで，フィンランドの研究者，実践家からスーパーヴァイズを受け，さらにはアメリカ，オーストラリア，イタリア，ギリシャなどの実践家，研究者達とも交流を取りながら，わが国への応用，発展を目指す研究にも参加しています。研究の他，自閉スペクトラムをはじめとする乳幼児期の療育の実践と親のコンサルテーション，教育現場の教師への神経発達症への対応に関するコンサルテーションを定期的に行っています。

本年度のゼミ合宿は夏休みに2泊3日で草津温泉へ行って参りました。伝統ある（古い！？）大きなホテルで，研究発表会場は，カラオケルーム（！）でした。台風18号（アジア名：アータウ）直撃でしたので，アクティビティは全くできず，せっかくの草津温泉街で湯畑見学もずぶ濡れ状態でした。足湯だけでも行きたかったかな…。

諸活動

Osada, H., Yamamoto, S., Shoji, Y., & Ueno, R. (2015, August). Development of the Infantile Interview Guide for Early Detection of Neurodevelopmental Disorders. The 12th International Family Nursing Conference. Odense, Denmark.

長田洋和（2015）。疫学は融合的心理科学と呼べるか？専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センター平成27年度シンポジウム「融合的心理科学の創成－心の連続性を探る」専修大学，東京。

長田洋和，栗田広（印刷中）。第4章精神科臨床評価－特定の精神障害に関連したもの。知的能力障害（知的発達症／知的発達障害）。臨床精神医学44巻増刊号（2015年12月増刊号）特集；「精神科臨床評価法マニュアル 2015」。アークメディア，東京。

平成26～28年度科学研究費助成事業（学術研究助成金（基盤研究C）「小中学生におけるネット依存，発達障害，およびCU特性の関連に関する研究」）研究代表者

江戸川区教育委員会 特別支援教育専門家チーム（心理臨床）

日本乳幼児医学・心理学会 評議員，編集委員

日本発達障害学会 評議員

澤研究室（学習心理学）

私たちの研究室では，主にヒトや動物が経験によって行動を変えていく学習という現象について研究しています。平成27年度は，教員1名，研究員3名，大学院生4名（博士課程

3名，修士課程1名），学部生8名という構成でした。昨年度までの研究を踏まえて，今年度もラットを用いた学習理論研究，恐怖反応の再発と抑うつに関連や抑うつ動物モデルの妥当性といった臨床的応用に関わる研究，因果推論やself-agencyといった問題の研究を行うとともに，ウマを用いた比較認知科学的研究，東京慈恵会医科大学と共同で行動薬理学的研究などを進めています。他大学や企業との共同研究を積極的に推し進め，行動観察ソフトや力学的解析，ベイズモデリングなど新しい手法を導入しています。

諸活動

Miyashita, H., Kurihara, A., & Kosuke, S. (2014). Effects of trial numbers of forced swim procedure on conditioned fear renewal in rats. 2014 Psychonomic Society Annual Meeting. Hyatt Regency Long Beach Hotel in Los Angeles, California, USA

澤幸祐（2015）。Oral presentation in English for dummies. 学会企画シンポジウム「学会での初めての英語オーラル発表」，日本心理学会第79回大会，名古屋国際会議場

澤幸祐（2015）。シンポジウム「異種間で伝達される社会的シグナルの探求－種を超えて結ばれる絆の形成メカニズムの解明に向けて－」企画，日本心理学会第79回大会，名古屋国際会議場

関口勝夫・牛谷智一・澤幸祐。（2015）。コラム3 スニッフィー（ソフトウェアを用いた仮想動物）による比較心理学の実習。日本心理学会・認定心理士資格認定委員会（編）。認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎。金子書房。pp. 102-105。

澤幸祐・牛谷智一。（2015）。コラム7 動物の行動観察。日本心理学会・認定心理士資格認定委員会（編）。認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎。金子書房。pp. 221-223。

澤幸祐。（2015）。（分担執筆）動物たちは何を考えている？－動物心理学の挑戦－，日本動物心理学会（監修），藤田和生（編著），技術評論社。

高田研究室（深層心理学）

院生4名，学部生14名のゼミとなりました。今年は台湾への留学から帰ってきた5年生もいて，賑やかなゼミでした。毎年のことですが，3年生が4年生になると急にお兄さん，お姉さんになり，しっかりしてきます。今年もこの現象がみられ，夏合宿では，買出しから鍋奉行まで，しゃきしゃきと仕切ってくれました。9月の半ばに合宿を組んだのですが，高原はもう寒く，恒例の外の食事は難しく，海の幸・山の幸の鍋となりました。

一昨年・昨年と引き続き，修士1年生6名が，大妻女子大学大学院，お茶の水大学大学院との合同の試行カウンセリングに参加いたしました。他大学院の院生と試行カウンセリングを行い，そのスーパーヴィジョンを受けるという実習です。SVを毎回行うのですが，そのたびごとの成長がみられることが楽しみでした。試行カウンセリング体験をもとにし

た、スーパーヴィジョンに関する研究は3年目になりましたので、まとめに入っているところです。

諸活動

日本箱庭療法学会第29回大会 研究発表「風景構成法を通してみる家族関係」(神田有里子) 司会 (於:東北福祉大学)

下斗米研究室 (社会心理学)

下斗米研では、人の社会的環境への適応過程を研究しています。平成27年度の室員構成は、教員1名、学部生12名(4年5名、3年7名)でした。今年度も、(1)理性的で快適な人間関係や集団の形成条件を見いだすこと、(2)対人関係や集団成員の苦悩防止と自己発達・成長方策の探索、(3)差別や排斥、葛藤や紛争なく、集団や個人らしさを大切にしたい協力的社会を構築するための必要条件を見いだすこと、という3つの研究室伝統テーマのもと、調査や実験による研究活動が積極的に推し進められました。今年度の3年生は、基礎研究というよりも実学的側面を重視した問題意識を有していた分、実証ベースに載せていく上での苦労があったことと思います。しかし今年度の研究活動が次年度には大きな実を挙げることと期待しているところです。4年生は、3年次のデータからさらに新たにデータセットを作り議論を深めたり、新たな最新の解析手法を用いて精緻な分析を進めるなど、いっそう意欲的に取り組み、とても頼もしく思いました。研究成果の一端は、Social Psychology Bulletin of Shimotomai Laboratory, Vol. 5, March, 2015において公刊されています。新歓コンパ、夏合宿やピザ・パーティ、追いコン、そしてエンドレスの合評会などは今年も顕在でした。

諸活動

著作

山上精次・藤岡新治・下斗米淳(編著)(2015) 図説現代心理学入門 四訂版 培風館

下斗米淳・風間文明・角尾美奈・飛田操(2015) 世間からの影響過程における自己機能の研究1:自己機能の検討。日本社会心理学会第56回大会, 14-01。

角尾美奈・下斗米淳・風間文明・飛田操(2015) 世間からの影響過程における自己機能の研究2:警告反応としての社会的不安の検討。日本社会心理学会第56回大会, 14-02。

Somatori, K., Sakamoto, J., Shimotomai, A., & Kunisato, Y. (2015) What is a true measure for meta-cognition?: A Bayesian cognitive modeling approach. 48th annual meeting of the society mathematical psychology. P.90.

社会的活動

労働安全衛生総合研究所研究倫理委員

日本学術振興会専門委員

最高裁判所委員

山上研究室 (発達心理学・比較・発達認知)

平成27年3月15日に、総ページ数70ページの専修大学山上

研究室年報 Annals of Yamagami Laboratory Vol. 5 を刊行しました。第5巻は、3年生のプレ卒業論文3編と実習助手の榎本玲子さんの論文「道具の使用方向と身体近傍空間の変容の関連についての検討」および山上による巻頭言「心理測定」から「基礎実験2」へ(2)」が掲載されました。なお昨年度の第4巻ではプレ卒論文が1本も掲載されないという事態になっておりましたが、その自然の帰結として今年は卒業論文が1本も提出されませんでした。35年あまりの教員生活史上初めての、とても残念な事態となりました。

昨年度から引き続き、研究法1, 2の授業において、授業日(昨年度から月曜日に変更)の0時まで、発表者は発表用資料をTeXで作成し、それをPDF化してアップロードすることを求めています。また発表担当以外のメンバーは、授業までに必ず発表資料に目を通すことをルール化しました。

なお学生が山上にアクセスする際の利便性向上のために、山上の所在をインターネットから確認可能な「ウェブ表示システム」を継続して運用しています。

諸活動

山上精次(2015)「心理測定」から「基礎実験2」へ(2), Annals of Yamagami Laboratory, 5, 1-12.

石黒良和・榎本玲子・山上精次(2015) 幼児の感情的役割取得対人問題解決から予測される対人行動 専修大学人間科学部論集心理学篇, 5, 1-13.

林大輔・大西まどか・山上精次(2014) デジタル数字のクラウドニング効果と視覚処理の階層性の関係 日本基礎心理学会第33回大会, 2 A25.

榎本玲子・山上精次(2014) 道具の使用方向と身体近傍空間の関連についての検討 日本基礎心理学会第33回大会, 2 A33.

堀越歩・小林正法・真田原行・榎本玲子・山上精次(2014) 幼児における虚記憶の発生メカニズムと自己制御機能の関係 日本基礎心理学会第33回大会, 1 A19.

鈴木玄・山上精次・大久保街亜(2015) 視線変化による注意捕捉は男女で異なる 日本心理学会第79回大会, 2 PM-077.

石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治(2015) 援助要請と生活適応感の関連性? 他者軽視と自尊感情の観点から? 日本心理学会第79回大会, 2 EV-027

大岡駿介・榎本玲子・山上精次・村松励(2015) 自己制御資源の消耗が欺瞞行動に及ぼす影響, 日本心理学会第79回大会, 3 EV-019.

堀越歩・榎本玲子・山上精次・吉田弘道(2015)。キーボードタッピングが侵入記憶に及ぼす影響, 日本心理学会第79回大会, 3 EV-087.

社会的活動

学校法人専修大学 評議員, 理事

社団法人日本心理学会 代議員

日本基礎心理学会 理事

独立行政法人大学評価・学位授与機構 文学・神学専門委員会心理学部会委員

吉田研究室（発達臨床心理学）

私たちの研究室では、本来は臨床的な課題に関して発達心理学の観点から研究することを念頭に置いています。しかし、臨床を実際に絡めて研究することには時間と研究倫理上の困難が伴うため、無理のない範囲で、発達の観点をいれながら、それぞれが研究を進めています。27年度の構成メンバーは、大学院1年生1名、2年生2名、学部4年生7名、3年生6名です。大学院2年生は、修論研究を進めています。研究テーマのキーワードは、侵入記憶と遮断、セルフ・コンパッションです。4年生は、卒論研究を進めています。研究テーマのキーワードは、自立、アタッチメント、出生順位、ソーシャルスキル、向社会的行動、共感性、被服行動、自尊感情、自己呈示、自意識、化粧行動、アリキシサイミアなど、さまざまです。よい研究がまをることを期待しています。

諸活動

吉田弘道（2014）。遊戯療法（プレイセラピー）とはなんですか？ カウンセリングとはなんですか？ 原仁責任編集，最新子どもの発達障害事典，90-91，合同出版

吉田弘道（2015）。子どものこころの発達，滝口俊子編著 子育て支援のための保育カウンセリング，41-59，ミネルヴァ書房

吉田弘道（2015）。子育て支援と発達臨床心理学－発達精神病理学の視点を加えて－，専修人間科学論集，心理学篇，5，1，31-40，専修大学人間科学学会

吉田弘道（2015）。小特集「子育て支援と発達精神病理学」にあたって，子育て支援と心理臨床，10，68，福村出版

吉田弘道（2015）。子どものまとまっている心を育てる子育て支援，小特集「子育て支援と発達精神病理学」，子育て支援と心理臨床，10，77-82，福村出版

堀越 歩・榎本玲子・山上清次・吉田弘道（2015）。キーボードタッチングが侵入記憶に及ぼす影響，日本心理学会第79回大会，名古屋

滝口俊子・青木紀久代・亀口憲治・菅野信夫・高橋幸市・馬場禮子・繁多進・深津千賀子・吉田弘道企画，臨床心理士子育て支援合同委員会共催 シンポジウム 大上律子・大島剛・厚坊浩史・高石恭子・藤森和美（2015）。大災害を経験した子育て支援システム－破壊・再建・発展－，日本心理臨床学会 第34回秋季大会，兵庫

吉田弘道（2014）。Book Review 日本遊戯療法学会編「遊びからみえる子どものこころ」（日本評論社，2014）児童心理学，12月号 No995，126，金子書房

吉田弘道（2015）。書評，P. フォナギー／M. タルジェ著 馬場禮子，青木紀久代監訳 「発達精神病理学からみた精神分析理論」，（岩崎学術出版社）精神分析研究，59,2,253-255

吉田弘道（2015）。指定討論，日本遊戯療法学会 第21回大会 研究発表1-1，小島ゆり，問題行動の無い施設入所

児童にプレイセラピーを導入することについて，兵庫

吉田弘道。気持ちに寄り添う言葉，母子保健協会設立80周年記念 第35回シンポジウム，座長 前川喜平 テーマ「保育における言葉とコミュニケーション」，母子保健協会主催，2015，2，9 東京

吉田弘道。指定討論・奥山千鶴子・橘 玲子・波田野茂幸・青木紀久代・馬場禮子・菅野信夫・深津千賀子・柏女霊峰・亀口憲治，第11回子育て支援講座，地域における子育て支援－臨床心理士の新たな役割－，臨床心理士子育て支援合同委員会開催，2015，7，5，京都

吉田弘道。気持ちに寄り添う言葉がけ，志木市立保育園，職員研修会，2015，10，21，志木

社会的活動

日本小児精神神経学会代議員

日本小児保健協会 機関誌「小児保健研究」編集委員

日本小児保健協会 小児科・小児歯科保健検討委員会委員

日本臨床心理士資格認定協会・日本心理臨床学会・日本臨床心理会による臨床心理士子育て支援合同委員会委員

日本臨床心理士会 保育臨床専門部会委員

川崎市子ども・子育て会議委員

Ⅲ. 本年度開催行事

4月18日～19日 第9回心理学科フレッシュマンキャンプ 於 専修大学伊勢原セミナーハウス

平成19年に最初のフレッシュマンキャンプを開催して以来，毎年4月に主に1年生の懇親を目的として継続して開催してきた。新入生と学科の専任教員の全員が参加し。学部の実行委員も含めて交流する学科公式行事である。例年通り2年生から4年生の実行委員が前年度より企画を立て，当日の運営を行った。当日は新入生も楽しみ，新入生，教員，実行委員の親睦も深まる有意義な行事となった。

Ⅳ. 卒業論文題目

原 久人 健常者を対象とする，ARを利用したナビゲーションデバイスの有用性の検討

島津未沙希 フェンシング競技者における身体化とメンタルプラクティスについて

間壁 皐月 アタッチメントと共感性およびアレキシサイミアとの関連

伊藤 勇 概念間の関係が記憶の抑制に及ぼす影響の検討

岡 一輝 八田興一の病跡学的考察

伊藤 俊輝 出生順位と親の養育態度とソーシャルスキルとの関連

林 靖夏 社会的状況におけるセルフ・モニタリングのプロセス・モデルの検討

福原 未菜 音韻と音読が語の記憶に及ぼす影響

今岡帆乃美 刑法犯罪発生数に影響を及ぼす諸要因 ～各町の項目より犯罪発生率を推測する～

- 石田 雅 子どものペット化とペットの子ども化
高橋 友美 『銀河鉄道の夜』にみる宮沢賢治の姿—「ほんたうのさいはひ」の探究—
西平 将汰 被害妄想的観念と孤独および絶望感の関連について
松浦恵理奈 小・中学校における特別支援教育コーディネーターの機能的な遂行に関する探索的研究
小野由香子 裁判員の量刑判断に影響を及ぼす要因の検討—視覚刺激を中心に—
村山 彩夏 社会的動機の阻害様態による社会的排除類型の検討： 社会的痛みの生起構造の理解
菊池 羽音 原因帰属スタイルに着目した AD/HD 児の二次障害予防についての検討 —行動の統制感、抑うつ、方略の量的・質的分析から—
中村 優里 情動的な刺激は虚記憶を抑制するのか？ —DRM パラダイムにおける提示時間の操作を用いた検討—
仁添 未亜 イメージの視点と対人不安・抑うつとの関連—公的自己意識と不快情動喚起状況におけるイメージの内的・外的視点の観点から—
チャ ユンギ 関東の大学生における薬物に対する意識調査
常盤 一星 時間再生法による時間知覚とアルファ波の関連についての検討
田中 哲太 映像法を用いた中途肢体不自由者へのイメージ変化と想定法の有効性に関する検討
小林 奈央 感情表出の抑制パターンと大学生のストレスが抑うつに及ぼす影響についての検討
上村佳菜子 顔の魅力が視線による注意シフトに及ぼす影響
八田 大輝 ロジスティック回帰分析によるモデリングと予測、ブランド価値の比較
吉澤 友恵 顔の表情探索における情動連想色の影響
穴戸 良伍 音楽聴取が n バック課題の正答率と α 波に及ぼす影響
登坂 美咲 スピーチ不安に及ぼす漸進的筋弛緩法と表情操作の効果
星野 里奈 痩せ願望傾向が顔の過大視に与える影響
吉岡 伊織 過剰適応モデルの検討 —動機づけと主観的幸福感の観点から—
大野妃沙奈 マリリン・モンローの病跡学 —時代が変化しても変わらない魅力—
小川 泰史 コンジョイント分析と心理指標の親和性の検証
村松 光希 性的嗜好における形成要因及び性差の検討—ラブスタイルとの関連を交えて—
坂口佳奈映 パートナー選択において男性が同性他者から受ける影響 —同性他者の魅力と関係性—
石井 杏樹 柳原白蓮の心理学的考察 —なぜ女性からの支持を受けたのか—
小野川まゆ 青年期における拒絶経験と拒絶感受性、認知的評価、コーピングの選択について
小菅 望美 交際の文脈が男性によるパートナー選択に与える効果 —女性の身体的魅力との関係—
石井 真優 ジェンダー的視点から見たディズニープリンセス
久保田百香 大学生用ストレス尺度の作成とストレス因子の抑うつへの影響についての検討
野澤 実央 自己呈示および自尊感情と被服行動の関連について
横田 詩乃 過剰適応が心理的自立に及ぼす影響について—愛着の観点から—
横山 健介 幼稚園児における共同作業の発達 —砂場に埋められたボールの探索課題遂行に及ぼす二人組の性別構成および協力/競争教示の効果—
関根 智子 乗馬運転がヒトの気分とストレスに及ぼす効果
大場 広貴 拒絶に対する過敏性と社交不安が抑うつに及ぼす影響 —ソーシャルサポートの緩衝効果の観点から—
刀根 聡史 社会的動機と過剰適応の関係性モデル —ストレス生起メカニズムの理解に向けて—
三澤 栄仁 凶器の形状の特徴が凶器注目効果に及ぼす影響
北野 薫 大学生生活の QOL と対人不安及び異性不安との関連について
鈴木 千文 ペアレント・トレーニングにおける発達障害児をもつ親の精神的負担の軽減効果について
岡井 美樹 好意の感情と恋愛傾向はつきまとい行為を助長するか ～人格特性との関連をふまえて～
武田 千咲 自己意識・他者意識と化粧行動、及び化粧意識の3因子構造との関連
齋藤 彩音 宮崎駿が描く女性像の変遷とその魅力 —元型的少女から母親へ—
木内 瑞希 心理的効用に基づく、被服行動の類型化 —被服による精神的健康および社会適応の検討—
谷口 琴美 出生順位による性格特性が社会的スキルとライフイベントに与える影響について
関 功太郎 ライフレビュー参加による大学生の高齢者意識の変化
伊藤 優花 青年期における自立心に関する研究 —アタッチメント、親の夫婦関係、友人関係に着目して—
間庭 百花 時代経過に伴うバラバラ殺人の変遷
内村 紗樹 養育態度と、向社会的行動および共感性の関連について
井上ゆかり シナリオが惹起する妬みに認知的負荷が及ぼす影響
服部 尚樹 大学生のパーソナリティ分類と嫌悪条件に関する探索的研究
北條 大樹 項目反応理論 (IRT) のロジスティックモデルにおける JAGS と Stan の推定精度及び推定速度の比較検証
土谷 美月 スチューデント・アパシーと認知コントロールの関連 —代替情動ストループを用いて—

今村 祐太 提示時間が顔の魅力評価に与える効果 ―平均顔仮説の検討―

金子 美帆 価値割引パラダイムを用いた先延ばしの測定 ―回避・衝動性の観点から―

新山 勲 マンガ家・手塚治虫の病跡学的研究 ―天才を支えた不変のテーマ―

小池 裕貴 大学生における児童期の行動抑制傾向と社交不安の関連について

清水 彩花 自己顔を用いた顔の既知性が顔情報処理に及ぼす影響 ―事象関連電位を指標とした研究―

土館 佳子 肯定的・否定的自己複雑性と自己受容、問題解決能力との関連

塩田花乃子 嫌悪感情認知における視聴覚情報の相互規定性

小川あおい 注意を向けない対象の情報処理 ―自然概念を用いたフランクナー課題による検討―

V. 優秀卒業論文

HP24-0011E 村山 彩夏（指導教員：下斗米淳）

HP24-0066H 土谷 美月（指導教員：国里愛彦）

HP24-0070E 金子 美帆（指導教員：国里愛彦）

VI. 修士論文題目

ML14-7001C 池田 佳祐 セルフ・コンパッションと恥、罪悪感との関連（吉田・下斗米）

ML14-7002B 平賀 正樹 日本の大学生におけるためこみ症のスクリーニングについての検討（長田・大久保）

ML14-7003K 太田 純平 文脈刺激変化が物質依存の再発に与える影響（澤・石金）

ML14-7004H 柚取 恵太 メタ認知が恐怖条件づけの獲得・消去プロセスに与える影響―ベイジアン認知モデリングによる潜在過程の推定―（国里・下斗米）

ML14-7006D 佐藤 駿 順応時間による知覚時間変化への影響―視覚的時間知覚メカニズムの多層性の検討―（中沢・石金）

ML14-7007B 大岡 駿介 自己制御資源の消耗がその後の欺瞞行動に及ぼす影響についての検討（村松・山上）

ML14-7009J 中橋 飛鳥 塗り絵の不安低減効果（高田・中沢）

ML14-7010B 平井 叶実 対人方略とソーシャルサポートによるストレス緩衝効果の関連について（高田・石金）

ML14-7011K 黒坂 泉 境界性パーソナリティ傾向と衝動的行動の生起プロセスの検討（藤岡・大久保）

ML14-7013F 時田 棕子 生態学的経時的評価法を用いた喫煙と渴望の関係：マインドフルネスの調整効果の観点から（国里・澤）

ML14-7014D 成島 絹登 特別支援教育推進体制チェックリストの有用性に関する探索的研究（長田・下斗米）

ML14-7015B 堀越 歩 侵入記憶に対する視空間課題の効果―視空間課題と言語課題の比較―（吉田・山上）

ML14-7016A 石井 里穂 星と波テスト（SWT）に関する研究―描画後質問（Post Drawing Inquiry）が及ぼす影響に着目して―（高田・中沢）

ML14-7017J 池田 紗苗 大学生の「甘えたくても甘えられない」心性の検討―甘え欲求と甘え行動による比較―（村松・中沢）

ML14-7018G 加藤 雅士 眼球運動による幻効果の検討（大久保・石金）

ML14-7019E 坂本 次郎 抑うつと痛みの将来予測―階層ベイズモデルによる意思決定の検討―（国里・大久保）

ML13-7003E 石黒 良和 援助要請と生活適応感の関連性―自他評価感情と援助要請の結果予測に着目して―（藤岡・山上）

VII. 修士論文研究優秀ポスター発表

最優秀賞

ML14-7019E 坂本 次郎（主指導：国里愛彦，副指導：大久保街亜）

ML14-7004H 柚取 恵太（主指導：国里愛彦，副指導：下斗米淳）

優秀賞

ML13-7003E 石黒 良和（主指導：藤岡新治，副指導：山上精次）

ML14-7015B 堀越 歩（主指導：吉田弘道，副指導：山上精次）

ML14-7016A 石井 里穂（主指導：高田夏子，副指導：中沢仁）

VIII. 研究室専任教員異動

平成27年度は、藤岡新治教授が特任教授となりました。次頁にこれまでの研究室専任構成員の在職歴を示します。

専修大学心理学研究室専任構成員の在職歴

開設・改組	年度	人格	学習	生理	知覚	発達	社会	臨床	認知	発達臨床	臨床心理学	犯罪	臨床心理学	障害(児)	心理統計	助教	実習助手	他学部専任教員
文学部人文学科 心理学コース	S42 1967	重松 毅	金城 辰夫	河内 十郎	中谷 和夫												野口真知子	植山源代子〔経済〕 中野繁喜〔経済〕
	S43 1968		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S44 1969		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S45 1970	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S46 1971	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S47 1972	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S48 1973	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S49 1974	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S50 1975	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S51 1976	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S52 1977	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S53 1978	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S54 1979	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S55 1980	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S56 1981	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S57 1982	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S58 1983	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S59 1984	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S60 1985	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S61 1986	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S62 1987	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	S63 1988	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 1 1989	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 2 1990	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 3 1991	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 4 1992	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 5 1993	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 6 1994	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 7 1995	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 8 1996	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 9 1997	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 10 1998	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 11 1999	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 12 2000	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 13 2001	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 14 2002	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 15 2003	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 16 2004	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 17 2005	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 18 2006	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 19 2007	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 20 2008	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 21 2009	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 22 2010	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 23 2011	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 24 2012	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 25 2013	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 26 2014	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	H 27 2015	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	高田 夏子	澤 幸祐	石金 浩史	中沢 仁	山上 精次	下斗米 淳	国里 愛彦	大久保純理	吉田 弘道	藤岡 新治	村松 勲	岡村 陽子	長田 洋和	岡田 謙介	久方瑠美	榎本 玲子	波田野由美
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—